

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月31日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520442

研究課題名（和文） びん語びん東区方言群祖語の再構

研究課題名（英文） Reconstruction of the Proto Eastern Min sub-group of Min

研究代表者

秋谷 裕幸 (AKITANI HIROYUKI)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：10263964

研究成果の概要（和文）：

- (1) 咸村、九都、虎貝三方言のデータを用いてびん東区寧徳方言祖語を再構した。またこの祖語がびん東区方言群祖語と非常に近い関係にあることを指摘した。
- (2) 古田方言のフィールドワークを行いデータを収集した。そして古田方言が音節末子音以外についてはびん東区方言祖語と非常に近い関係にあることを指摘した。成果は「びん東区古田方言研究」として出版した（海外共同研究者・陳澤平教授との共著）。

研究成果の概要（英文）：

- (1) This research reconstructed the Proto *Ning-de* (寧徳) dialect of Eastern-Min according to the data of three sub-dialects of *Ning-de* (寧徳) dialect; *Xian-cun* (咸村) dialect, *Jiu-du* (九都) dialect and *Hubei* (虎貝) dialect. The research showed that the Proto *Ning-de* (寧徳) dialect is considerably close to the Proto Eastern sub-group of Min.
- (2) I did the fieldwork on the *Gutian* (古田) dialect of Eastern-Min, and collected large amount of its data, and showed that the *Gutian* (古田) dialect is considerably close to the Proto Eastern sub-group of Min except for the final consonants of the syllable. I published the monograph “*Study on the Gutian dialect of Eastern Min* (びん東区古田方言研究)” (in Chinese) with my colleague *Chen Zeping* (陳澤平).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語学・方言学・びん語・びん東区方言群・祖語・再構・音韻史

門構えの中に「虫」の文字がパソコン上で表示できないため、本科研費報告書では「びん」とひらがなで表記する。

1. 研究開始当初の背景

(1)

①「切韻」の音韻体系を参照することなく、諸方言間の比較のみに基づき、各方言群それぞれの祖語を再構する中国語諸方言音韻史研究は、ワシントン大学 Jerry Norman 教授のびん祖語再構 (“Tonal Development in Min”. *JCL* 1-2, 1973 年等)を除くと、前世紀にはほとんどなされなかった。方言におけるさまざまな音韻現象をもつばら「切韻」の枠組みに基づき解釈するという、Bernharl Karlgren に遡る方法論が、金科玉条となっていたためである。

②ところが前世紀末あたりから、特にアメリカの学界において、この状況に変化がみられるようになった。例えば William Baxter 教授の官話祖語の再構 (“Reconstructing Proto-Mandarin Retroflex Initials”. *JCL monograph series* 15, 1999 年等)、South Coblin 教授の徽語祖語再構 (“Comparative Phonology of the Huizhou Dialects”. *Bulletin of Chinese Linguistics* 2-1, 2007 年)等である。研究代表者自身も 2003 年に「呉語処衢方言(西北片)古音構擬」(好文出版、全 191 頁)を出版した。

(2)

①びん語びん東区方言の研究は、Jerry Norman “A Preliminary Report on the Dialects of Mintung”. *Monumenta Serica* 33, 1977-78 年)、陳章太・李如龍「びん語研究」(語文出版社、1991 年)等を除くと、おおむね福州方言およびその周囲の方言、いわゆる侯官方言群を主たる対象として展開されてきた。

②この状況に鑑み研究代表者は、2002 年以来、北部の方言、いわゆるびん東区福寧方言群とびん東区蛮話方言群の調査研究を行ってきた。2007-2008 年李方桂語言学論著特優奨を受賞した「浙南的びん東区方言」(台湾中央研究院語言学研究所、全 284 頁、2005 年) [泰順方言、蒼南方言の記述]や「びん東語福寧方言群の調査研究」(平成 17-19 年度科研費報告書、全 273 頁、2008 年) [虎貝方言、九都方言、咸村方言、福安方言の記述]等がその主たる研究成果である。

2. 研究の目的

びん語(中国語十大方言のひとつ)びん東区方言群に属する中国浙江省(1)泰順方言、(2)蒼南方言、福建省(3)寧徳市虎貝方言、(4)寧徳市九都方言、(5)周寧県咸村方言、(6)福安方言、(7)霞浦方言、(8)福州方言、(9)古田方言の音韻データからびん語びん東区方言群の祖語を再構し、「びん語びん東区方言古音構擬」(中国語で執筆)の初稿を研究期間内に完成させる。福州方言以外はすべて申請者自らが調査したファーストハンドのデータを用いる。

3. 研究の方法

本研究の方法論に関して述べておくべきは主として以下二種である：

一つはびん東区方言再構のためのデータをフィールドワークにより収集することである。この部分については研究代表者たる私自身が大学の休み期間を利用して実施した。「方言調査字表」や中国の方言学界で一般的に用いられている語彙調査票、例文調査票などを用いたオーソドックスな調査である。古田方言および寧徳方言(咸村、九都、虎貝)が調査の対象であった。既成のデータがこれらの方言には存在しなかったか、または存在しても十分に信頼の置けるものではなかったためフィールドワークを実施する必要があったのである。

ついでこれらのデータ、およびこれまでに私が蓄積したデータを用いてびん東区方言を再構する。ここで用いるのは最もオーソドックスな比較方法(comparative method)である。なんの新味もないように思われるかもしれないが、「1. 研究開始当初の背景」に記したように、中国語方言学にあつては、比較方法の適用が今なおきわめて斬新な試みと考えられているのである。

4. 研究成果

(1)「研究の目的」の達成度

まず上の 2. に記した「研究の目的」がどの程度達成できたかをまず述べる。

遺憾ながら上記「びん語びん東区方言古音構擬」を研究期間内に完成させることはできなかった。

びん東区方言祖語の再構には、音節末子音に関して祖語の状態をもっともよく保存して

いる寧徳方言の祖語を再構することが必要不可欠である。そのため、この課題に取り組み、寧徳方言祖語をほぼ再構することができた。成果の一部については学会発表もした（下記〔学会〕発表③参照）。研究のこの部分については平成24年度内に正式発表することができる状態にある。しかしながら寧徳方言祖語の再構に予想以上に時間をとられ、びん東区方言祖語の再構は時間切れとなってしまった。

寧徳方言祖語を再構して判明したのは、寧徳方言祖語がびん東区祖語に非常に近いということである。〔図書〕①で「鶯類字」および「tuo類字」と名付けた二つの音類を寧徳方言祖語に加え、寧徳方言祖語で*-uo、*-uon、*-uotを蒼南方言のデータを参照し*-io、*-ion、*-iotに改めたならば、それがすなわちびん東区祖語なのである。したがって、当初の目的達成までかなり近いところまで研究を進めることができたと言っていいと思う。また寧徳方言祖語再構の過程において、同じ調類がある場合には音節主母音の舌位をさげ、ある場合には舌位をあげる、この一見不可解な現象に介音の長短が関わっていることを見いだしたことは重要な成果だったと思う。これまでまったく注意を向けられることのなかった介音の長短、この特徴からびん東区諸方言音韻史を再考する必要があるだろう。

なお寧徳方言祖語再構には咸村、九都、虎貝三方言のデータを用いた。これら三方言は互いにコミュニケーションが可能で、地理的にも隣接して分布している方言である。にもかかわらず規則的な対応を得ることが出来ないケースが多く現れた。現地調査で再チェックも行ったが、やはりこのような不規則的対応を解消することが出来なかった。

また、本研究開始以前から古田方言がびん東区方言群祖語と近い音韻状態を保っているのではないかと予想していたが、その予想の通り、この方言が音節末子音以外の部分でびん東区方言祖語と非常に近い状態を保存していることを自分自身が行ったフォールドワークのデータから見いだした。古田方言のこの重要性に鑑み、本研究課題では古田方言の調査・研究も精力的に行った。調査は順調にすすみ、古田県大橋方言と杉洋方言に関して質のよいデータを大量に収集することができた。そこで、その成果を〔図書〕①「びん東区古田方言研究」（海外共同研究者・陳澤平教授との共著）として出版した。古田（大橋）方言の韻母体系が明末清初の福州方言を反映す

るとされる「戚林八音」と音類、音価ともほぼ完全に一致することを見いだしたのは、重要な成果と言えると思う。またこの図書の5.1.2.2において、現在までに私が到達したびん東区方言祖語の陰声韻に関する結論を簡潔に記した。

以上記した、寧徳方言祖語の再構（未発表）と「びん東区古田方言研究」が、この研究課題の最重要成果である。

(2) その他の研究成果

以上二点以外に、本研究の実施に伴う研究の成果として以下三点がある：

(a) びん東区方言群の分類

びん東区方言は従来「侯官グループ」「福寧グループ」「蛮話グループ」と三分割されていた。それに対し、私は今次の研究成果に基づき全体を「北グループ」と「南グループ」に二分割し、「北グループ」が「蛮話グループ」と「福寧グループ」からなるという分類案を提出した。従来の「侯官グループ」は「福州グループ」と「福清グループ」に二分割した。

(b) 「班華字典—福安方言」の研究

これまでほとんど研究されていなかった「班華字典—福安方言」（スペイン語と福安方言の辞書、出版されたのは1941-1943年）の初歩的研究を行い、その音韻体系を復元した。この辞書の基礎となるおよそ200年前の福安方言にも寧徳方言と同様、七種の音節末子音が保存されており、それゆえびん東区方言祖語の再構に対して有益なデータを提供することが期待される。

(c) 「びん東区福寧片四縣市方言音韻研究」の出版

本研究で再構のデータとする霞浦方言については2010年3月に出版した本書においてその音韻体系を詳しく記述・分析し、また同音字表を提示した。本書で記述したのは霞浦県長春方言であるが、この方言と城関方言を比較することにより、古い段階の霞浦方言に音節末韻尾の対立が保たれていたらしいことが明らかとなった。本研究課題にとって重要な発見だったと思う。

(3) 国内外へのインパクト

[図書] ②についてはすでに「中国語文」など学会有力誌に引用されている。また寧徳方言祖語再構に関しては招待された「第八届台湾語言及其教学国際學術研討会」で発表した〔学会発表〕③参照。比較方法を用いた中国語方言祖語の再構という研究は台湾の学界でもほとんど行われていないため、参加者に相応のインパクトを与えることができたと思う。〔雑誌論文〕①は中国社会科学院から出版され、学界に大きな影響力を持つ「方言」に掲載された。今後、相応のインパクトを与えることが期待される。

(4) 今後の展望

本課題の研究目的はびん語びん東区方言群の祖語を再構することであった。その目的は遺憾ながら達成することができなかった。しかしびん東区諸方言において音節末子音をもっとも良好に保存する寧徳方言の祖語は再構し、またびん東区方言がいかなる様相を呈するかについては〔図書〕「びん東区古田方言研究」に記すことができた。

今度の計画としては、2012年度内に著書「びん東区寧徳方言音韻史」の原稿を出版先に提出し、2013年度内に著書「びん語びん東区方言音韻史研究」の原稿を完成させる。必要データ自体は研究期間中に整えることができたので、この計画は決して実行不可能なものではない。

そしてこれらの成果は最終的にはびん北区方言群祖語、びん東区方言群祖語、ほ仙区方言群祖語、びん南区方言群祖語、びん中区方言群祖語、邵将区方言群祖語から再構されるびん祖語へとつながっていくのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件) すべて中国語で執筆

- ① 秋谷裕幸「班華字典—福安方言」音系初探。「方言」2012年第1期, pp. 40-66。2012年2月24日。査読あり。
- ② 秋谷裕幸「論びん東区方言的分区」。「羅傑瑞先生七秩晋三寿慶論文集」(余靄芹、柯蔚南主編、香港中文大学中国文化研究所吳多泰中国語文研究中心)、47-76頁。2010年6月。査読あり。
- ③ 秋谷裕幸「びん東霞浦長春音系簡介」。「中国語言学集刊」(紀念李方桂先生中国語言

学研究学会、香港科技大学中国語言学研究中心編、中華書局出版發行) 第三卷第二期, pp. 69-129。2009年7月。査読あり。

[学会発表] (計4件) ④以外は中国語で発表、④は日本語で発表

- ① 秋谷裕幸「びん東古田杉洋方言的帰属」。第十二届びん語国際研討会。2011年11月5日。台湾中央研究院語言学研究所。単独。中国語。
- ② 秋谷裕幸「びん東区古田県大橋方言的音韻特点」。日本中国語学会第61回全国大会。2011年10月29日。松山大学。
- ③ 秋谷裕幸「原始寧徳方言古音構擬—二合、三合元音韻母部分」。第八届台湾語言及其教学国際學術研討会。2010.10.15~10.16。台湾国立聯合大学。
- ④ 秋谷裕幸「原始寧徳方言古音構擬—m/-p尾韻部分」。日本中国語学会第60回全国大会。2010年11月14日。神奈川大学。

[図書] (計2件) すべて中国語で執筆

- ① 秋谷裕幸、陳澤平「びん東区古田方言研究」。(中国)福建人民出版社。2012年3月。290ページ。
- ② 秋谷裕幸「びん東区福寧片四縣市方言音韻研究」。(中国)福建人民出版社。2010年3月。251ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋谷 裕幸 (AKITANI HIROYUKI)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：10263964

(4) 海外共同研究者

陳 澤平 (CHEN ZEPING)
福建師範大学・文学院・教授
研究者番号：なし